

現代の親子や地域に必要とされる支援

中野由美子 (目白大学人間学部 生涯福祉研究科教授)

これから必要とされる家庭支援とは

1978年、「幼児教育は親教育から」「日々の生活の営みから生まれる親による家庭教育支援」という発想からスタートした0歳～3歳児の親子教室があります。私はこの教室の立ち上げ以来30年間、その活動に関わってきました。この教室の目的は、保育者と子どもたちのかかわる姿を親が目当たりにして、人との関係の中で子どもが育っていく過程や保育者のかかわり方を学ぶ機会、親子関係を相互に見せ合うことによって親が自分の子育てに気づき、子育て方法を学びあい相互に助け合う機会を提供することです。子どもを預かる保育だけではなく、親子参加の場を親子の学びの場、成長の場、仲間づくりの場につなげていく家庭支援です。

1980年代には、母子密着と子育て不安に対応して「母子分離」と「母子の自立」支援を、1990年代には、少子化に伴う遊び仲間の喪失と母親の子育て負担感に対処して「親子の仲間づくり」と「父親参加」支援を、2000年代には、親の未熟さと発達の独自性を失った子どもの問題が浮き彫りになってきたので「親子遊びによる親子のコミュニケーション向上」と「親としての充実感」、「子どもの自我発達」支援をと、親子の様子に合わせて30年間の支援活動の重点も変わってきました。

急速な変動社会によって、少子化時代以前の親に比べてこの20数年間の母親の親準備性は、「乳幼児との接触体験がない」15%→27%、「世話をした体験がない」41%→55%と、減少の一途をたどっています。体験がなければ、子どもの発達理解や子育て技術が未熟で不安や悩みをもち、解消されない不安が増幅してイライラ感や負担感を招き、育児ストレスや育児ノイローゼ、ひいては虐待傾向のある親も現れることになります。

子育てで支援の考え方は、親世代からの育児伝承や地域の人々の無形の支援が欠如した結果、母親だけに偏った子育て負担を社会的資源の活用によって分散し、親が子育てしやすい環境と子どもの健全な育ちを保障することです。親や家庭の状況に応じて、長時間保育や金銭給付などの物理的支援、情報提供や相談事業による情緒的支援などの多様な支援が必要な場合も

あります。

それとともにこれからは、健全な親子関係を築く機会を提供する支援が不可欠であると考えます。今世紀に入って、保育施設の新しい役割として、就園児とそれ以外の地域の子育て支援活動、具体的には健全な親子関係づくりや親の養育力向上をめざして行う相談・助言・行動モデルの提示(保育指導)が加わりました。しかし、現状体制では、保育施設が地域の保護者への保育指導を十分に果たせるとは思われません。

現代の親子関係の危うさ

親子の投書から構成された2009年の年明けのNHK番組「子どもサポートネット」では、「かわいいのについ手が出る・子育てが思うようにいかない」という親の本音と「家庭に居場所がない」という子どもの心の叫び、家庭の孤立と親の焦燥感・子どもの不安とが渦巻き、親子関係づくりの難しさが浮き彫りになっていました。

最近もっとも危惧されるのは、言葉による関係作りができる以前の幼い子どもへの無理解やマルトリートメント(不適切な扱い・虐待なども含む)ではないかと思われまます。社会システムや親の生活リズムがどんなに加速化しても、「ヒト」に固有な発達の独自性・子どもが育つプログラムが急変するわけではありません。現代の親や大人には、人生早期の身近な人との相互作用が培う身体感覚や模倣力、共感力、その結果が言葉の獲得を促す過程への理解と感受性を養う機会が必要であると思います。

相手の身体リズムへの同調によって安心感を育む<抱く―しがみつく>関係、まなざし・表情などの視覚的やりとりによって微妙な変化を読みとる<みる―みられる>関係、心身のリズムが相手に同調してしまう<共感する―まねる>関係、そこから生まれる視線の共有(共同注意)や言葉の獲得<聴く―話す>関係が、表情や意図を捉えて意味を推測・判断する力(社会的承認)にまで育っていくのです。最近の研究では、観察・模倣・共感をつなぐ特定箇所(ミラーニューロン)が脳内の言葉を発する領域(運動性言語野)にあり、人としてのコミュニケーション力の要所であるといわれています。生物として育つヒトの成長の基盤は、言

業や知識だけではなく、もっと原始的な五感の力、間主観性というような科学知を超えた見えない力に依存しているようです。

現代社会の子育ての根源には、体験知が欠けぬゆえに言葉と情報に頼りすぎる親側の育てるリズムと、身体感覚や生理的リズムの共有から模倣力・共感性・応答性を培う子どもの発達リズムとのボタンの掛け違い、そこからマルチトリートメントや不健全な親子関係が生み出される危険性があるようです。

こうした観点から、これからの必要とされる支援の中心は、仲間や地域の人々との交流によって、生物学的な親を社会的・心理的な役割担当者としての親へと育てていくことにあります。これからの親には、子どもの育ちに応じた親役割を観察学習し、確認しあう場や人との出会いの機会が必要です。対処療法的な相談・助言ばかりでなく、子育て体験を共有する仲間同士が互いに観る、学ぶ、確かめあう、相互支援の仕方を身につける機会が必要です。それは、科学的知識の提示ではなく、子育てを共有する人々が参加して体験や情報を出し合い感情を共有し、悩みつつ自分自身を見極めてその対処力を養うことによって、自己確認と自信をつけ、相互に楽になる力をつける「自助グループ」的参加の場です。

専門家よりも共通経験者であるピア（仲間）の存在が心理的防衛を和らげ、仲間との体験交流が情緒的・情動的サポートとなり、支援する側・される側の役割循環が地域の子育てネットワークの担い手づくりにつながっていく、そんな支援システムが望ましいのではないのでしょうか。「みんなでやればできるし楽しい、あの人ができるなら私にもできるかも、あの人を見習ってみるとうまくいく、私も人の役にたたい・たてる」、そんな集団学習による効力感や相互援助が発想の基本になります。保育施設は、保育の場を活用した将来の地域子育てサポーター養成の場になってほしいと思います。保育の現場で養成された支援者こそ、地域の親育てのファシリテーター、家庭と園・地域をつなぐネットワークにふさわしい存在になると思うのです。

子育て支援を支える地域のあり方

いまなお子育て支援の主流は保育施設ですが、その許容量はいまや限界です。子育て支援のレベルや内容はさまざまであり、地域生活に吸収できる機能を分散する必要があります。もちろん、発達障害や精神疾患、児童虐待などの専門的対応が必要な親子支援には、地域の保健・療育・治療・医療の専門機関、あるいは福

祉の専門機関との連携が欠かせません。

しかし最近では、地域の人々が支える支援の試みもたくさん生まれています。3時を過ぎると「これから下校が始まります。見守りをよろしくお願いします」という校内放送の児童の声、それだけで地域の子どもへの関心が活性化されます。空き教室や地区センターなど行政施設を利用した幼児からシニアまでの世代間交流に成功している事例、養成講座をとおして地域のシニア世代を子育て支援者に育成する活動を応援するNPO法人、ショッピングセンターや空き店舗を利用した地域の遊び場活動など、形式にとらわれない地域の子育て支援活動も動き始めています。こうした活動の中心は地域住民ですが、その組織づくりや連携を応援するのは行政の役目です。将来の親子備軍である小中高生が参加できるシステム作りは、地域での次世代育成支援そのものになります。

子育て支援が長時間保育や子育ての外注という親の負担感軽減という発想に偏りがちな今日、近隣や地域、学校や保育施設が親・保護者の役割を支え・育てていくシステムと支援者をつくること、そこへの次世代参加の促進によって、現代社会での失われがちな生命への感受性や親性・養護性を養うこと、負担感や辛さばかりが話題にされる子育てや親子関係づくりをより明るい、楽しい人生経験に変えていくこと、これが現代の親子や地域に必要な支援の一つであると思うのです。

<参考文献>

- 中野由美子・土谷みち子、『21世紀の親子支援』、ブレーン出版、1999
- 原田正文、『子育ての変貌と次世代育成支援』、名古屋大学出版会、2006
- 大日向雅美編、『地域の子育て環境づくり』子育て支援シリーズ3、ぎょうせい、2008